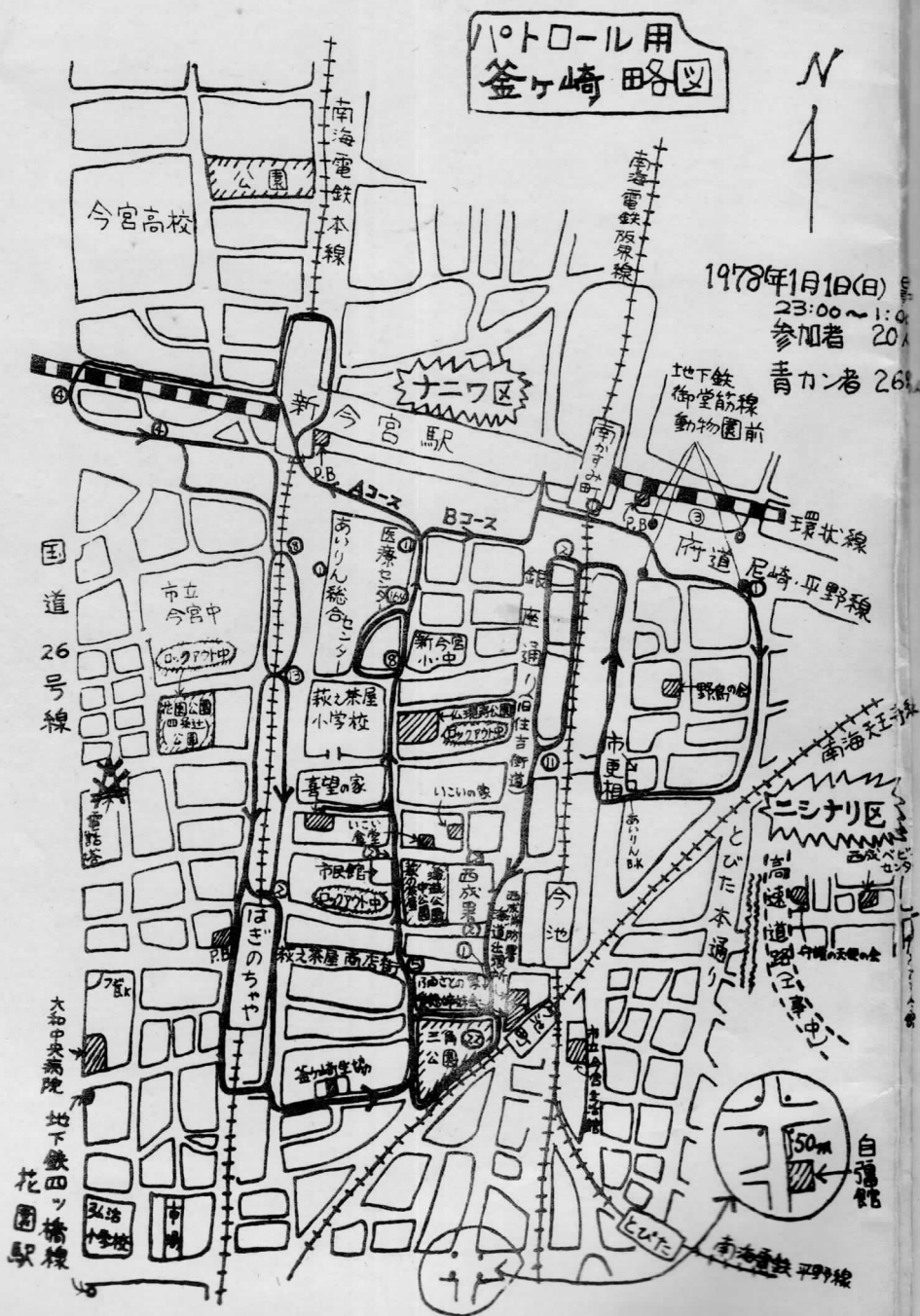


釜ヶ崎 1977年冬



キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

「釜ヶ崎1977年冬」もくじ

1977～78年越冬支援の特徴	2
1977～78年越冬日録	4
1978年釜ヶ崎越冬セミナー報告	7
正月の200人を越す青カン(野宿)は、何を語りかけているのか	
—— 青カン統計を整理して	26
青カン者実態調査について	30
釜ヶ崎では、なぜ『結核病院への完全入院を保障せよ』が	
越冬のスローガンとなるのか	32
<hr/>	
支援呼びかけビラ	
●あたたかい支援の手を釜ヶ崎へ、釜ヶ崎の越冬に300万円のカンパを!	8
●さらなる支援の手足を釜ヶ崎へ、夜間医療パトロールに人材を!	
炊き出しにはカンパを! —— 釜ヶ崎越冬活動中間報告	9
釜ヶ崎における越冬についての要望書(抄)	11
炊き出し利用者数推移グラフ	12
<hr/>	
K.J法による、越冬を中心とした釜ヶ崎の問題	13
インデックス図解	14
医療の問題	16
酒	16
労働者の意識	17
青カンの実態	18
支援の問題	20
支援の中におけるキリスト教の問題	21
労働の問題	22
行政の対応	24
<hr/>	
キリスト教釜ヶ崎越冬委員会構成団体	36
<hr/>	
語源:アオカン	29
編集後記	38

表紙説明 1978年1月1日のパトロール地図。線と矢印はパトロールの道順、
○数字は青カン(野宿)者の数と場所をあらわす。

一九七七〜七八年

釜ヶ崎越冬支援の特徴

はじめに

「死者を出さない」を合言葉に、過去の越冬においては、支援の内容においては同じでありながら、ある意味では個別に関わっていた協友会、K U I M、地域研が、「キリスト教釜ヶ崎越冬委員会」にまわって支援を展開できたことは、特に情勢の厳しかった今年の越冬支援の中での明るい材料であった。以下簡単にふり返ってみたいと思う。

1、行政との対応

11月22日に大阪市に対して「要望書」提出。今年は特に昨年のパトロールの結果をもとに、青カン（野宿）者の保護の問題を中心に「要望書」を提出したが、大阪市からは昨年同様、誠意ある回答はなかった。大阪市の釜ヶ崎の日雇労働者に対する対応は、「市民」としてではなく、「非民」としてある。それは同時に、市民の中にある釜ヶ崎に対する差別と偏見によって支えられている。キリスト教釜ヶ崎越冬委員会としては、たえずそのような市民意識をつきとずすこと、又、市職員等には末端から個人的に、あるいは一人の人間として、釜ヶ崎の現実をどうみるかという問いかけの必要を痛感

した。「要望書」についてはさらに、もっと早く出す必要を確認する。

2、支援カンパ及び支援の呼びかけ

11月29日、第一回目の支援要請を全国の諸教会、学校等に約二千通発送。又2月1日には中間報告を含めて第二回目の要請を二千三百通発送。今年は支援組織の足並がそろったことが幸いして、カトリック教会、修道会からの資金カンパが多く、目標額三百万円を大きく上回り、五百万円を少し越すカンパが集った。

同時に、遠方からわざわざ布団や衣類のカンパを沢山送っていた。近隣の諸教会からも資金と同時に、布団、衣類を沢山いただき、三つの公園が閉鎖され、たき火で暖をとれない労働者が寒さを防ぐために随分役立った。

神戸学生青年センターを通して、兵庫県市島町の有機農業研究会より多くの野菜、卵をいただいた。このことについては今後共、関わりを持ち続け、援農へと発展させて行きたいと思う。

3、炊き出し

利用者の状況については別紙参照。委員会からは、釜ヶ崎越冬闘争実行委員会に対して百万円を資金カンパした。又、有機農業研究会よりの野菜をそのまゝカンパ。私達の反省としては、本当に必要であれば、単にカンパで終らすのではなく、自らの手で行うべきでないかと反省。このことと関連して、3月以降も継続されている炊き出しに、さらにカンパをする必要があるかどうか検討中である。

4、パトロール

昨年度の青カン者数の最高は1月1日の二〇六人であったが、今年は1月3日二八一人を記録した。一日平均の昨年度との比較においても、二〇人多い。又、昨年同様、年末年始の大阪市の臨時宿泊所開設の時期に多く、市の対策の有名無実を裏づけている。一方、今年には昨年の経験からくる慣れによる、キメの細さに欠けた点、公園閉鎖に伴う労働者の参加のとぼしさが、残念であった。しかし、わずかではあっても、何人かの労働者との結びつき、支援で参加された方々に釜ヶ崎の問題の一端を理解してもらったことは、成果の一つである。

5、医療及び医療券発行

基本的に週一回土曜日を担当。1月7日より、週一回の病院訪問を行う。昨年の越冬と今年の越冬を通して二五人程度の労働者と関係を持ったが、反面病院数も一二にのぼり、私達の力だけではカバーできない状態になって来た。その中で、ある教会からは近くの病院を訪問してもよいという話があり、現在検討中である。又、せっかく入院しても、孤独や見通しのなさから来る飲酒による自己及強制退院が多く、病院、労働者から実状を聞き、取り組みを始めている。又、結核が依然として多く、早急に対策が望まれるが、現在のところ、適切な対応策が見つかっていない。

釜ヶ崎における医療は、多くの問題をはらんでおり、総合的視野から考えられなければならない。越冬後の最大の課題である。

6、その他

a 越冬セミナー

1月1日〜3日まで、申込み一八人、延べ参加八四人。多方面から参加者があり、準備不足にもかかわらず、盛況であった。私達にとつても、あらためて釜ヶ崎をとらえ直す良い機会であった。この教訓をもとに夏、冬のセミナーに生かしていきたい。

b 他の寄せ場との交流

12月10日、横浜寿町の保健婦、渡部さん他三人に来てもらい、医療についての学習会を地域研と越冬委員会の共催で行なう。

1月29日の中間報告会には、名古屋で炊き出しを続けているグループに参加を呼びかけ、現状報告を聞いた。

現在のところは、ささやかな交流であるが、お互いに深め、教訓を生かし合って行きたい。

c スライドによる情宣

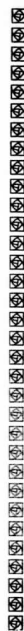
昨年の越冬支援の模様をスライド「釜ヶ崎1976年冬」にまとめ、各地の諸教会で上映。

むすび

越冬支援総括集会を3月5〜6日、神戸学生青年センターで行ない、越冬後の課題について話し合う。パトロールは越冬後も毎週月曜日に継続して行なうこととし、越冬委員会を毎月第二、第四月曜日に開き、今後の取り組みが一定程度明らかになるまで存続させることを確認した。

最後に、物心両面、様々の支援をしていただいた多くの方に心より感謝いたします。なお「越冬」は季節の問題でないことは、特に今年の越冬の中で感じられることです。今後ともよろしく願います。

一九七七年～七八年越冬日録



11月12日	第8回釜ヶ崎越冬闘争実行委員会。大阪府・市に対して「要望書」提出。
11月22日	キリスト教釜ヶ崎越冬委員会。大阪府に対して「要望書」提出。回答11月末日。
11月29日	全国の諸教会、学校などに第一回目の支援要請発送（五〇〇〇枚）
11月30日	11月末日だが大阪市から何の連絡もない。大阪市は、11月末から12月にかけて、釜ヶ崎内の四公園中、三公園（花園・仏現寺・海道）を1月31日まで改良工事を理由に全面閉鎖。
12月12日	釜ヶ崎越冬闘争連帯集会。於、部落解放センター。連帯集会実行委員会からの要請により、スライド「釜ヶ崎一九七六年冬」を映し、またキリスト教越冬委からもあいさつ。集会後、参加者による釜ヶ崎実態調査（参加者二五〇人）
12月13日	大阪市、海道公園のフェンスはりを終え、公園の門に鍵をかける。 キリスト教越冬委代表（七人）、大阪市民

12月24日	生局生活係と会うが、「要望書」の回答は一つ出さなかった。 越冬闘争実行委、七時からの夜間医療パトロールをはじめ。 三角公園で、第8回越冬闘争決起集会ひらかれる。支援の参加者多数。
12月25日	なお、12月23日から、2月24日まで毎金曜日後七時～九時まで、計10回、越冬支援連絡会議がもたれた。 第8回越冬闘争はじまる。 炊き出し。AM九時、PM一時、七時の三回医療券の発行。AM九時（市民館まえ） 医療パトロール。PM七時三〇分、十一時の二回（応急、救急、スリーブくばり等々） 日刊「えつとう」紙の発行。 センター前の布団敷（PM九時） キリスト教越冬委員会。今日から2月末まで支援体制にはいる。とくに医療パトロール、病院訪問に力点を置く。
12月26日	越冬委は以後、毎火曜日PM九時～十時半まで打合せ。
12月29日	今日と三〇日の二日間、市立更生相談所で無料臨時宿泊所の受け付けがあった。公募では一〇〇〇人だが、実際には、一二〇〇人、主として南港埋立地のプレハブに入る。しかし、

青カンは相変わらず多い。テレビ毎日、ドキュメントのために取材が続けている。

12月31日
のど自慢大会（PM六時、三角公園）は、雨のため1月1日に延期。

1月1日
1日～3日まで、キリスト教越冬委主催で「越冬セミナー」を開く。テーマは「釜ヶ崎とわたし」於、喜望の家。参加者、計八四人（延）。1日「釜ヶ崎とは何か」、2日「日本の差別構造」、3日「今後の課題」。

1月3日
もちつき大会、於、三角公園。AM一〇時～PM二時。青カン二八一名で最高。

1月4日
大阪市に対して、越冬実と支援労働者による抗議。最後は、例の通り、機動隊がでてる（AM十時～十一時）。のち、南港埋立地のプレハブ宿泊所にバスで一回面会と抗議。

1月7日
キリスト教越冬委による週一回の病院訪問はじまる。

今日で臨時宿泊所終る。

1月10日
1月9日、KCCでKUIIM例会があり、越冬について報告。

支援要請のおもて書きはじめる。

1月11日
三角公園、大阪市の手によって大掃除。

1月13日
越冬闘争中間総括集会、於、市民館。とくに十二月より10日までの中間総括、労働者からいろいろ意見が出される。

越冬実、中間の諸資料だす。

1月14日
暁光会取材のため、「アサヒグラフ」の記者がパトロールに同行。

1月16日
横浜寿町では、越冬闘争弾圧に対する反撃集会がひらかれた。

1月17日
名古屋では、駅前炊き出しに対して弾圧がつよまる。

1月18日
労働者の話では、仕事もボツボツ出だしたと言う。ただし、青カン一五八人。

1月19日
NCC部落問題委員会の有志が、パトロールに参加。

1月20日
水飲場の大掃除があり、集っていた人たちは、第2ガードに追われる。

1月21日
1月29日の中間報告集会の呼びかけのため、1月19日、20日と近隣の教会を訪問して参加を呼びかける。

1月22日
えまうすひとりの会主催のコンサート盛會。於、ふるさとの家。

1月23日
1月20日、萩ノ茶屋住宅前でおれていた人は、救急車でこぼれて二時間後に大和中央病院で死んだことが、訪問でわかる。

1月26日
地域研「釜だより」第十三号、越冬中を徹夜で編集印刷。

1月27日
センター前で、三〇才ぐらいの身元不詳の男死亡。

三菱電機労組から、組合機関誌取材のために二人くる。

1月29日	越冬中間報告会、於、聖ヤコブ教会、五〇人参加。
1月30日	同夜十一時四五分〜十二時十五分まで、テレビ毎日（MBS）、テレビルポルタージュで「越冬―釜ヶ崎日雇労働組合」を放映。
2月1日	越冬中間報告の發送準備にはいる。
2月2日	2月1日、2日でいたい發送できる。
2月4日	約二三〇〇通。
2月7日	この冬、一番のひえこみ、PM十一時でマイナス一・五度。
2月11日	越冬実、炊き出しのときに衣類を配る。
2月13日	PM二時〜三時、仏現寺公園附近で、行路病死発見。
	パトロール中に、26号ガード附近で、ダンボール箱の中で死んでいる人を発見。朝日、毎日などのマスコミに連絡、2月6日の朝日に記事がでる。
	KUIM例会、喜望の家で開かれる。協友会の働き、越冬について報告。例会参加者、パトロールにも参加。
	水俣の大沢さん来訪。水俣と釜ヶ崎について交流。
	三角公園から救急車に添乗して、阪和にいき、入院が出来た。（〇氏）

2月14日	最近、西成署による炊き出し前後の弾圧がはげしくなる。今夜は、炊き出し後、医療センターに行く途中、ほぼ全員なぐるケル。暴行をうける。
2月17日	テレビ朝日。炊き出し、医療パトロール等の撮映に来る。
2月19日	行路死あいつぐ。西成の日雇労働者の「死」を小山珠夫氏（三〇才）が、朝日の「声」欄に投稿（2月16日）
2月20日	今朝、また市民館前で行路死出る。夜テレビ朝日、1月17日撮映のフィルムを「タイムシックス」で放映。
2月22日	青カン実態調査。於、医療センター前、十七名に面接、引き続き、二十三日も行う。
2月23日	昨年の四・七代執行の大阪市相手の裁判、（損賠）の第四回公判。
2月25日	病院訪問やパトロール中に知り合った労働者が相談に来る。
2月27日	今朝また、第2ガードで行路病死発見。
2月28日	越冬実、釜日労は三里塚支援に出發しパトロールはキリスト教越冬委のみ。
	第8回越冬闘争はおわるが、問題は山積している。「終わった」という実感なし、と「日誌」にある。

一九七八年

釜ヶ崎越冬セミナー報告

釜ヶ崎越冬セミナーは、越冬委員会の主催により、次のように行われた。

とき 一九七八年一月一日～三日

於 釜ヶ崎 喜望の家

参加者 男一人、女五人、計一六人

テーマ 「釜ヶ崎とわたし」

セミナー目的 釜ヶ崎の越冬プログラム

(医療パトロール、炊き出し、衣料

整理、バザーなど)に参加しながら、

釜ヶ崎とわたしたちとの関係を現場

を通して学習する。

責任者 金井愛明牧師

プログラム

第一日目(集合午後二時)

● あいさつ ハインリッヒ神父

● オリエンテーション 金井牧師

● 発題 「釜ヶ崎とは何か」

歴史——妹尾 労働——金井

民生(老人福祉)——ハインリッヒ

● スライド「釜ヶ崎一九七六年冬」

● 医療パトロール(二〇時～前一時)

第二日目(一月二日)

● 地域調査(釜ヶ崎、新世界、飛田、

長橋)——地図をたよりに地域の実態

についてグループで調べる

● バザーのための衣料整理

● 発題「日本の差別構造」

部落——今井 在日朝鮮人——崔

釜ヶ崎——小柳

● 医療パトロール

第三日目(一月三日)

「今後の課題に」ついて全体で話し

合う。また参加者は、各人のレポートを委員会に提出した

〈参加者の感想から〉

* *

釜ヶ崎という地が、かかえている問題は、

ふらりとやってきた人間が、二、三日そこに

居るだけで全てを理解できるほど簡単なもの

ではなく、長期間そこに定住し、苦楽を共にしてはじめて体得できるものであることを教えてくれました。(浜田)

* *

運動としての共同体を指向してきた私が、ここでもうひとつの方向、矛盾の顕在化している現場で生き抜きそこを改革して行こうというものを実感できたのは貴重であった。しかし、それと同時に、現場を生き切る困難さも感じている。

これから先、越冬に関わるることによって、私にとつて釜ヶ崎とは何かということをも、引き続き考えて行きたい。(角南)

* *

初めて参加して最も強く感じたところは、新世界あたりには正月の晴着姿はあつてもそこから二〇分ほど歩き釜ヶ崎に来ると労働者のジャンパーや作業着姿だけである。ほんとにまったく別世界であると強く感じた。そしてそこで生活している労働者に対する行政の冷たさが、一日、二日の夜の話(特に病院、老人問題)、そしてばくが直接、せつしたパトロールでの私服の警官の態度、救急車が出勤を拒否するという事実などで特にショックをうけた。(池田)

あたたかい支援の手を釜ヶ崎へ

釜ヶ崎の越冬に三〇〇万円のカンパを！

はじめに

急激に寒さが押しよせ、今年もまちがいに
く厳しい冬が訪れることを告げています。釜
ヶ崎の日雇労働者なかでも病弱・身障そして
高令のため、なかなか仕事にありつけない労
働者にとって、「冬」は死を意味します。そ
のなかで、わたしたちは今年も越冬支援活動
をはじめるとあり、皆さんに支援を訴えま
す。昨年は、一六八件、二〇一万五五八七円
のカンパと多数の物資の支援をいただきました。
心からお礼もうしあげます。

労働行政の貧困

さる一〇月二六日、釜ヶ崎では一度に六名
の労働者が路上で死んでいるのが発見されま
した。拾って来たフグを食べ中毒死したので
す。一昨年来、日雇労働組合により仕事にア
ブレた（失業）労働者に炊き出しは続けられ
ていますが、なにせ朝夕二回の麦雑炊では、
腹がへります。そこで、少しでも腹のたしに
と自炊したことが死を招いたのです。

驚くべき事実が明らかになりました。第一は、
この期間を通じて一日平日一〇〇人の青カン
の労働者がいたことです。第二は、大阪市が
一二月二七日から一月九日まで無料宿泊所を
開設したのですが、その期間も青カン労働者
は減らず、むしろ増え一月一日には二〇六人
にもなりました。

この中毒死の原因は、なによりもまず大阪
の労働行政の貧しさに求められなければなり
ません。東京都では例年、山谷の労働者に対
して、年末年始に「特出し」と呼ばれる特別
公共事業が興されます。今年も予算一億二千
万余円、一日の賃金五三〇〇余円ではじめら
れます。衣食住は、行政の「お恵み」ではな
く、なによりも労働者自身が働いていくこと
によつて確保できるのです。しかし大阪では、
その基本が何らなされていません。そこが、
一番の問題点です。わたしたちは行政に労働
対策を求めるとともに、労働行政の貧しさゆ
え青カン（野宿）や餓えをしられ、死に直
面しなければならぬ労働者が生きて春を迎
えるために支援活動をしませう。

無料宿泊所の実体

わたしたちは、昨年の一二月末から今年の
二月末まで青カン労働者の「生を守る」ため
に夜間医療パトロールをしました。その結果、

この現実は何を意味するでしょうか。もつ
とも必要とされている人々にその手がとどか
ず形式的になされていることです。つまり、
病弱・身障・高令の労働者が青カンをしいら
れていたことです。また、あまりの「自由の
なさ」に宿泊所を飛び出した労働者が多いこ
とです。たとえば、宿泊所は、大阪市のはず
れの南港の埋立地にポツンとプレハブで建て
られ、入所希望者は顔写真付きカードを持参
し、宿泊所の入所時にはいちいち警察官やガ
ードマンにチェックされるありさまです。ま
たどんな不満があつても「集団での話し合い
には応じません。」と誓約させられます。

ここには、労働者の生活を真剣に考える血
のかよつた民主行政はみられません。あるの
は「労働者対策」です。

医療体制の貧困

また、医療パトロールでも医療行政の貧困

さを見せつけられました。そのため、労働者は、死を押しつけられました。

医療パトロール中に、病気やケガで入院を必要とする労働者を、救急車で病院へ送りましたが、簡単な応急処置だけで再び寒風のもとへ投出された労働者はあとをたちませんでした。なかには、入院しなければ死ぬのがわかっていても、救急車による入院を拒否して「ここで死ぬほうがまだ」と言いきった労働者にさえ出あいました。

あるいは、結核患者で入院を拒否され、青カンしている労働者にも多数あいました。釜ヶ崎では、八人に一人は結核だと言われていますが、保健所や区役所さえ十分な相談にのろうとしません。医療グループは、患者と一緒に病院さがしをしなければなりませんでした。

今年の冬を前にして

このような現実を前にして、越冬後も釜ヶ崎地域問題研究会（キリスト教の越冬活動の中から生れたボランティアグループ）の医療班が中心になり、病院訪問毎土曜日夜の医療パトロールなどを続けていますが、本格的な冬を前にして、わたしたち、釜ヶ崎にかかわって来た三つのグループ、釜ヶ崎協友会、地

域問題研究会、関西キリスト教都市産業問題協議会越冬支援世話人会は、去る十一月十二日、キリスト教釜ヶ崎越冬委員会を結成し、今年も次のような具体的な取り組みをはじめようとしています。

- 一、大阪市・府への抜本的な解決を求める働きかけ……要望書の提出とその実現
- 一、労働組合を中心になされている炊き出しへの支援カンパ……一〇〇万円以上
- 一、餓死者・凍死者・病死者を出さないための夜間医療パトロール
- 一、その他必要な活動

××× 支援呼びかけピラ2 ×××

さらなる支援の手足を釜ヶ崎へ

夜間医療パトロールに人材を！ 炊き出しにはカンパを！

釜ヶ崎越冬活動中間報告

● はじめに

越冬支援も四週目を迎えました。とくに医療パトロールに力を入れている活動の中で、わたしたちは、昨年同様、労働者の「生命」が、紙くずやポロ布のごとく扱われている現実に直面し、怒りを禁じえません。

詳しい報告は、いずれ報告書でいたしますがとりあえずこれまでの支援を感謝するとともに、ここに釜ヶ崎の冬の厳しさを訴え、二月末までの支援活動を全うするためにも、再び、全国のみなさんに、心からの支援をお願いいたします。

これらを実行するために今年は、とくに期間中（二月二十六日～一九七八年二月末）、専任者をおいて積極的に取り組みたいと願っています。

これらの活動が実現するためにもみなさんのご協力を心からお願いたします。

一九七七年十一月

キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

代表 神父 S・ハイブリッヒ

釜ヶ崎協友会

釜ヶ崎地域問題研究会

関西キリスト教都市産業問題協議会

● 血と涙と人への愛こそは

オカミの天命であらねばならぬ

今年の越冬は、過去七回に比べて大変な困難の中で始めなければなりません。それは、これまで使用できた越冬の拠点、公園から閉め出されたからです。大阪市は、改良工事を理由に三公園（花園、仏現寺、海道）をトタン塀や金網をはりめぐらし閉鎖し、利用を禁止しました。期日が、一月末までというのは、あきらかに、越冬のたたかいに利用することを妨害したとしか思われません。労働者が自由に利用できる〈場〉がない釜ヶ崎で、公園は、唯一の交流の場です。一つ残された三角公園は、終日、暴力団が支配する公園を追い出された労働者は、たき火一つすることが許されません。あまり寒いので道路上でしていると警察官が消して歩く始末です。いま、釜ヶ崎の労働者は一つに集りたき火をかこみ話し合う場さえうばわれ、バラバラにされています。炊き出しも―これは生命にかかわることですので、路上で三度三度しています。しかし、妨害は執ようで、三度の警告後は、検挙するぞという弾圧があります。で

も、越冬闘争実行委員会を中心に頑張っています。（炊き出し利用者四〇七人、1月10日現在）

これが、失業時代に入り、まっさきにアブレ、そのうえ、高令、病弱、身障のために人間として生きる最低の権利さえ保障されていない、日雇労働者に対する大阪市や府のしうちです。このような状況におかれている労働者は、一〇〇人をくだりません。

● 歳の暮 正月などいらぬと アンコ言う (二労働者のことば)

大阪市は、昨年一二月一三日、わたしたちとの話し合いの席上、「青カン（野宿）に対する対策は」との問に対して、「いまやっていることが最良」とうそぶき、「これ以上やることは何もない。あなたたちが、パトロールをするなら、自分たちで発見者をどうするか考えてからにしてください」と暗にパトロールすることさえ無用だと言っています。これは裏がえせば、青カン者は、「死んでもらいます」ということになります。ちなみに、西成署が発表した数ですが、一九七七年一月から一〇月まで、青カン（路上）で死んでいった人が実に三三六人にものぼっています。この事実こそそれを裏付けていないでしょうか。

しかも、この死者は、一二月、一月、二月、三月に集中するのです。

次の表は、昨年度と今年度の青カン者の比較ですが急激にふえ、しかもへらないことが証明されます。加えて一二〇〇人、無料宿泊所にとまっているときもなお二〇〇人以上の青カン者のいることがわかります。これもまた、死と直面した労働者にとって、大阪市の民生行政が無に等しいことを物語っています。アンコ（労働者）の「正月などいらぬ」との叫びが痛いほどよくわかります。

● 「救急車も呼べへん」

一月一三日の越冬集会でパトロールを続けている一労働者は「救急車も呼べへん」と言つて絶句しました。どんなに身体をこわしていても、「しんどい」と訴えても、外見がよければ、救急車で運ばれた青カンの労働者は、注射と薬一袋で、真夜の路上へほうり出されるのです。たとえ、開放性の結核患者でも、事情は同じです。「救急車後」を考えると、うかつに救急車も呼べないことは、医療パトロールに参加したものの共通の体験です。越冬がはじまり、一月一〇日までに、開放性の

結核患者が、越冬実の手で実に一九人も発見されています。かれらは、やむをえず、青カ
ン労働者の間に、結核菌をまかざるをえな
ったのです。言うまでもなく、結核は法定伝
染病で、特別の立法措置までなされているの
ですが、釜ヶ崎では、このあり様です。不
議と昨年のコレラのようなマスコミの報道は
ないので。

● 協力要請

「越冬」は、年間の課題ですが、まず第一
段として二月末まで越冬支援のたたかいを続
けますので、とりあえず次のことを願いま
す。

一、資金、布団のカンパ 資金の方は、一
月一〇日で約二三〇万円集まりました。三〇〇
万円目標にあと一歩なのでよろしく。布団が
とくに不足しています。

二、パトロールへの参加 今回は夜十一時
に一回しています。週に一度、釜ヶ崎に足を
運んでください。

三、昨年の越冬支援のスライドの活用を
スライド一〇〇枚と三五分の説明テープ付き、
貸出料一回二千元（大阪市内の場合は、プロ
ジェクターもお貸しします）
一九七八年一月
キリスト教釜ヶ崎越冬委員会
代表 神父 S・ハイブリッヒ

釜ヶ崎における越冬についての要望書（抄）

〈要望理由〉 大阪市当局におかれましても、すでに 周知の
ように例年 釜ヶ崎において冬場 生活困窮者が続出し 「青
カン」と呼ばれる野宿をしている労働者はあとをたちません。
しかも それは個々人の責任というにはあまりにも大きな社会
的不平等、諸矛盾の結果によるものです。特に、餓死、凍死者
が出るにおよんでは座視することはできません。一大社会問題
であります。…大阪市当局におかれましても、今年もまた越
年対策を実施されると思いますが、より一層の充実を願ひこ
にわたしたちの活動によって明らかにした実態を示す資料を
そえて、以下のことを要望します。なお、要望に対する具体的
な回答を来る一月三〇日、午前一〇時までおよせください。

〈要望〉 釜ヶ崎に対する基本的姿勢について人権の尊重―いか
なる理由があろうとも、個々の労働者がかかえている状況を考
慮して、先ず行政としての責任をはたしていただきたい。

- 1 根本的対策について (イ)特別公共事業 (ロ)身障者 (ハ)老
人 (ニ)病人（結核予防法の実質的な運用）
- 2 具体的対策について (イ)青カンの防止につとめる。(ロ)臨
時宿泊所の開設と充実 (ハ)病気の労働者を完全に入院させる。

一九七七年一月二二日

キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

代表 神父 S・ハイブリッヒ

大阪市長 大島 靖殿

※ この要望書に対する回答は、今日（一九七八年八月）までなし。

炊き出し利用者数

